

Title	ピアル・ヘル村の経済と文化
Author(s)	勝藤, 猛
Citation	大阪外国語大学学報. 37 p.33-p.47
Issue Date	1976-03-01
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80593
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ピアル・ヘル村の経済と文化

勝 藤 猛

Piaru-khel : A Village in Eastern Afghanistan

Takeshi KATSUFUJI

” پیارو خیل ” د افغانستان یو کلی

لیکونکی : تاکشی کاخوفوجی

په ۱۳۴۹ هـ، ش کال کېنې زمونږ د توکیو پوهنتون علمی هیئت د افغانستان په دوو کلیو کېنې اجتماعی او اقتصادی څیړنې وکړې . یو د هرات ښارته نزدی تاجک قریه ده چه ” کبابیان ” نومېږی او بل ” پیارو خیل ” دی چه د لوگر د ولایت د کلنگارو پل علم په ولسوالۍ مربوط دی .

پیارو خیل له ښارو او نورو کلیو څخه لرې د غرو په منځ کېنې پروت دی او د دوو کاریزونو په وسیله آبیاری کیږي . د دی کلی د نفوسو شمیر ۳۶۵ دی او ټول ئی پښتانه دي . معمولاً په پښتو ژبه خبرې کوي مگر زیاتره ئی فارسی هم پوهیږی .

دلته د زمیندارۍ سیستم کوچنی مالکیتی ده او څه کسان هم شته چه مخکه نلری او دهقانی یا مزدوری کوي . خلک ئی اکثرأ په زراعت بوخت دي او ځینی په کابل کېنې مأموریت لري . په زراعتی حاصلاتو کېنې ئی غنم او جواړی اهمیت لري . حیوانات هم تربیه کیږی لکه غوایی ، غواوه ، خره ، پسونه او وزې .

I 村の概況

1 位置

アフガニスタン国の首都カーブル市から南へ出る幹線道路は、カーブルの西端から出て南々西に向かい、かつてのガズニー朝の都でスルターン＝マフムードの墓廟のあるガズニーを経て、パシュトゥン族の一大中心地カンダハールに達するもので、これはアジア・ハイウェイの一部をなす。それともう1本あり、カーブル市の東端から出て、上述の幹線道路と山脈を隔てて平行に走るものである。これは北流してカーブル川に注ぐ Lōgar 川の西岸に沿っており、1970年当時は舗装工事中であった。カーブルから約70キロのところで Pul-i-Alam という橋を渡ってさらに南に進めばバクティアー州に入り、その中心ガルデーズに至る。橋を渡らずに西に折れてしばらく行くとローガル州政庁のある Barakī barak に達する。そのままさらに西進すればガズニーに出る。

ローガル地方はもとカーブル州に属していたが、1964年に全国の地方行政区分が改編された際に独立したものである。この州には次の県 *wuləswālī* と小県 *‘alāqadārī* がある。

県 *Kulungār o Pul-i-‘Alam*
Muḥammad Āgha
Arzō

小県 *Charkh*
Khushī

当時の関係人事は、国王 *Muhammad Zāhir Shāh* (73年退位)、首相 *Nūr Aḥmad I’timādī*、ローガル州知事 *Muḥammad Ya‘qūb ‘Aṭā’ī*、ピアル・ヘル村長 *Malik Sardār* である。

この州の集落は主としてローガル川ぞいにある。そのひとつ *Khwāja Akbar* 村は、その住民はタージクとパシュトゥンとハージャから成るという。「ハージャ」とは初代カリフ＝アブー・バクルの子孫とされるもので、かつては宗教的社会的特権をもっていたであろうが、現在はパシュトゥンやタージクと同じく *qaum* (民族・部族) つまり *ethnic group* とみなされている。この村のパシュトゥンはギルザイ系(Ⅲの1参照)のスタンキザイ族であるという。またこの付近には *Saiyid* の村もあるという。「サイイド」はマホメットの娘ファアティマとその夫アリーの子孫の称号であるが、これも今は民族名となっている。

Mīrzā-khēl 村はローガル川の東岸にあり、住民はすべてパシュトゥンであるが、カーブルに近いため、平日には男子はほとんどカーブルに働きに出て、村にはいない。

この村より南方で街道の西側に *Mughul-khēl* 村があり、人口949、すべてスタンキザイのパシュトゥンである。

この村の東方、街道と川の間にある *Wāghjān* 村は、人口207、パシュトゥンとタージクと半々である。川を隔てて東方に *Deh-i-Nau* 村がある。

以上の村はすべてムハンマド・アーガ県に属する。

プリ・アラムの北側にバーザールがあり、これをクルンガールという。そこから街道を離れて西北西に進み、*Bābūs* ほか2か村を通りぬけると荒野に出る。その涸川にそってさかのぼると村があり、*Piārū-khēl* という。海拔2,080メートル(カーブルは1,800)戸数55、人口365、すべてパシュトゥンで、スタンキザイに属する。

この村と外界との交通は、東方のローガル街道まで約20キロ、徒歩で4時間、自動車も通れるが、まともな道はないから1時間ほどかかり、夜は通れない。街道へ出てからカーブルまで車で1時間半である。一方、西方へは約10キロのところには山脈を越える峠があり、それを西へ下りるとカーブル＝カンダハール街道がある。村から街道まで徒歩3時間、カーブルへ行く村民はすべてこの道をとる。自転車も峠の一部を除いては走らすことができるが、自動車は峠を越せない。峠を下りた街道の地点を *Dasht-i-Tōp* といい、茶店が1軒あるだけで、集落はない。ここからカーブルまで車で1時間である。

カーブルからカンダハールに向かう旅客機は、離陸後約10分でこの村の真上やや西よりを通過する。

この村の周辺には次の村々がある。南方、低い稜線を越えると同じような東西の涸川の谷があり、これが Shuluk 村で、約60戸。その南に Mulla In'ām 村がある。北方には Kōh-i-Tan̄hā(独立峯)が望まれ、その東北に Qal'a-yi-Safēd 村があり、1時間行程。また東北方、50分行程のところに Mirwāl 村、つづいて Khaṛ Kārēz 村があり、ともに約15戸。これらの村はすべてピアル・ヘル村と同じく水源をカーレーズに頼る。本村とシュルクは2本ずつ、他は1本ずつのカーレーズを所有する。

ハル・カーレーズ村からそのまま東北に進めば前述のムグル・ヘル村に至る。ハル・カーレーズもスタンキザイに属する。

村にはアフガニスタンの他の村と同じく古文書がないから、村の歴史を文献によって確認することはできない。村民の言によれば遊牧民が定着した村であるという。この村の位置は、東方のニングラハール州・パクティアー州とアフガニスタン中央高地ハザーラジャートとの間を季節的に往来する遊牧民の通路に当っており、遊牧民との交渉が頻繁である。

この村は村民みずから「山に囲まれた」Kōh-band と形容するように、交通不便な僻地で、2本のカーレーズの水に頼って生命を維持している。村は涸川によって南北に分かれ、おのおの1本のカーレーズがある。家屋として、南北に各1戸望楼銃眼つきの村郭 qal'a があり、これが村でもっとも古い建築であって、その後しだいに普通の家屋、即ち平屋根の家屋と中庭とそれを囲む土塀の建物が増えて現在に至っている。

2 衣食住

衣. 純パシュトゥン風である。膝までの長さのシャツ、巾の広いずぼん、チョッキ、ターバン、サンダル風の革靴、それに白いショールである。チャパン、即ち綿入れの長衣はトルコ風であるから着ない。カーブルでは、ターバンを巻くものは下層、カラクル帽が中上層、無帽が最上層とされているが、この村の住民は村長以下すべてターバンを巻いている。ただこの村の出身でカーブルで役所勤めをしている者はカラクル帽をかぶっている。

この村の女性はすべて頭から背中だけをおおう布 chādūr をかぶる。全身をおおい目のところだけ網目になっている外衣 chadrī は都会の上層婦人の服装(最上層は洋服とスカーフ)で、この村では見られない。

食. 主食は小麦ととうもろこし。小麦は挽いてパンとする。とうもろこしはそのままゆでて食べるか、粉にしてパンにする。米はこの村では産しない。米の飯は特別の日にしかなべない。調査中、隣村シュルクで葬式があり、この村からも大勢が出席し、そのとき米食がふるまわれた。

肉は羊と鶏。羊は自家のものを11月初めにすべて殺し、吊るして干しておき、少しずつ切って使う。村に商店がなく、肉を必要な量だけ買うことができないので、肉が腐らなくなった季節に

羊を一斉に屠り、食いのばすのである。春にはそれがなくなり、また冬の初まで肉を食べることはない。

牛乳はそのまま飲むこともあるが、たいてい加工する。乳製品としてはまずヨーグルトがある。これは牛乳を煮沸して人間の体温ぐらいに冷えたところへ、前日にとっておいた種を入れてしばらく放置するとできあがる。このヨーグルトに水を加えて2～3時間攪拌すると上に脂肪分が浮いてくる。これがバターである。ヨーグルトからバターを除いたものを *dūgh* といい、塩や香辛料を加えて飲む。このドウグを布袋に入れて2日ほど吊るして水分を取り去ると *chaka* ができる。豆腐をつぶしたようなものである。またヨーグルトに塩を加えて煮つめて乾燥させると石のように固くなる。これが *qurūt* で、保存食品として貴重である。

茶はアフガニスタンを通じて紅茶と緑茶があり、ともに砂糖を入れて飲む。この村では主に紅茶で、砂糖は貴重品であり用いない。水はその用途をとわずすべてカーレーズによる。南側のカーレーズの出口に魚が群をなしているが、誰もこれを取って食べない。酒は一切ない。煙草は噛み煙草(緑色の粉末) *naswār* を用いる。

調査中に村長の招宴にあずかった。そのメニューはこの村で最高の食事と思われるので下に紹介する。

小麦粉パン

鶏スープ

米を牛乳で煮たもの *shīr-birinj*

小麦粉と羊脂と砂糖で作ったプディング *halwā*

紅茶

住。西アジアに普遍的なもので、日干煉瓦を材料とする平屋根の家屋に住む。パン焼きかまどに夏用と冬用とあり、冬用のものはその火がオンドル式に部屋の床下を通して暖房になる構造である。この部屋を *tau-khāna* (*tau* < *tab* 熱)といい、冬季の居間となる。電気はなく、照明にはランプを用いる。乗り物として、村には自動車はなく、自転車が数台と馬が1頭ある。

モスクにも夏用と冬用とある。前者は露天の木蔭の土盛りで、後者は屋内である。Shaikh Jān Baba という聖者の墓が南の丘の上にある。共同墓地は村の西のはずれにある。公衆浴場 *ḥammām* はなく、南カーレーズの出口に体を洗うための小屋がある。

3 年中行事

調査期間の10月14日、日没後に突如として村の西南の丘の上に十数箇の松明の炎が揺らいだ。聞けば今夜は *shab-i-barāt* で、ラマザンの15日前の行事であるという。しばらくして3人の村の少年が老人に扮して我々の宿舎に来てお布施を要求した。彼らは *malang* と呼ばれる。蒲生礼一『イスラーム』(岩波新書)にはいう。「第8月15日はシャブ・イ・バラート(記録の夜)と言って、この夜、神が人々の1年間に為すべき行為を記録すると言われます。預言者はこの夜、信者等に

徹宵百回の屈身礼拝を捧げるよう命じたと云います」この月日はイスラム旧暦による。この年1970年のラマザン月は10月30日から11月28日までであった。「マラング」とは宗教行事をしながら物乞いまたはゆすりをして放浪する不良の徒のことである。

村民の日常の行事としては、10月の中頃に麦蒔きが終り、小麦やとうもろこしの製粉がすむと、農作業は終りとなり、冬の用意をしなければならない。即ち雪が降り出す前に燃料を集めておくのである。男たちは野原へ出て buta を集める。それは「草」としか訳しようがないが、荒野の草のこととて、刺があり、茎は太く、根を深くおろしている。日本にあるのと同じようなつるはしを使って深く掘って根から引き抜く。この草はまばらに生えているから、多く集めるには広く歩かねばならない。村から片道1時間以上出ていく。集めた草は gīnda という細長い籠につめ、それを横にしてろばの背にのせて持ち帰る。毎日2回、20日間ほど続けるという。

冬が来ると、3か月間、一帯は雪におおわれる。人々はタウ・ハーナにこもってじっと耐えているだけである。村外に用事があれば、何人かの集団を作り、狼を防ぐために銃をもって雪原を越えていく。春分の日がイランと同じくアフガニスタンの新年で、これから人々の活動が始まる。秋にすでに出て雪の下にあった麦の葉が頭をもたげる。5～6月は降雨と雪だけで水は豊か、太陽の恵みを受けて野も山も一面の緑、至るところが牧草栽培地のようになる。

調査期間中にこの村で出産・婚礼・葬式などはなく、聖者の墓への参詣も見られなかった。ただある日の真夜中に羊泥棒事件が発生し、ただちに床屋が太鼓を打ち鳴らして急を告げた。こういう警報のことをパシュトゥ語で chīgha という。またもう一度、本村からトルキスタンへ移住した人の男子と本村の女子との婚約が成立し、その祝いに太鼓が鳴った。太鼓を打つのは床屋の役目である。

4 未来

この村は2か所の水源に頼っている。その水量はほぼ一定である。したがってその水で灌漑できる農地面積も一定であり(約50ヘクタール)、その農地で養える人口も一定となる(365人)。近隣の村々も同様である。このような村においては、人口は水量の函数であるという乾燥地帯の公式が単純明快に示されている。

もしこれ以上人口が増加すれば、余分の人口は村から出て行かねばならぬ。行先として近いのはカーブルである。学問が少しでもある者は事務職を、そうでない者は肉体労働を求める。しかしカーブルには全国の余剰人口が集中しており、アフガニスタンという国は労働力を吸収できる事業は少ない。

この村の村民のある者は他地での公職から隠退したものである。また有為の青年は都市での就職を目ざしている。村民の一部が営む遠距離商業は時代の進展に取り残される恐れがある。結局、村民の多くは「山に囲まれた」この静かな村でつましく農業に精出す以外に道はなさそうである。政府や大地主に土地を奪われることはあるまいから、彼らの道は決して暗いとはいえない

——健康と勤勉のある限り。

文化の面においても著しい変化は起こりそうにない。人間生存の一種の限界にあるこの村であるから、余剰の富が蓄えられてそれで文明が作り出されることはない。村の文化は経済や社会と直結している。死ぬ者と生まれる者によって自然の交替が続けられていくであろう。何年か何十年たっても刮目に値いするような現象は期待できないであろう。

II 村の経済

1 農業

調査期間内についていうなら、9月下旬はとうもろこしの収穫期である。アフガン暦3月(5月22日～)に小麦を刈り取ったあとに播種したものである。刈ったとうもろこしは畑の一隅にある脱穀場へ運ばれる。婦人も協力して果実をもぎとり、茎は周囲に壁状に積み上げる。男たちは長い棒で果実を叩き種実をおとす。夜は盗難を防ぐために男が2～3人ずつ棒や銃をもって脱穀場に泊りこむ。泥棒は村の中にいるといわれる。

とうもろこしを刈ったあとは休閑とし、昨年から休閑してあった畑に小麦を蒔く。まず肥料を施す。それは *shūra* といって灰と獣糞を混ぜたもので、住居から畑へろばで運ぶ。まれに化学肥料(パキスタン製)を用いる。次いで灌漑する。土質が細かいから、水は浸みこむことなく満々とたたえられる。3～4日して水が浸みこんでしまうと、すきかえす *qulba kardan*。犁を牡牛2頭に引かせて畑を縦に横に進む。次がならし *mala* で、細長い板の上に人が乗って牛に引かせる。次がこなし *rakul* で、板を立てて引かせる。それから種をばら蒔きする。そのあともう一度すいて種の上に土をかぶせる。1週間ほどで葉が出て、そのまま冬の雪に埋もれる。

この秋蒔き小麦はアフガン暦7月(秋分～)に蒔き、翌年3月に収穫する。そのほかに春蒔の無灌漑小麦 *daima*, *lalmī* もあり、これは山麓の傾斜地を十分に耕起して1月(春分～)に蒔いて3月に刈る。小麦の収穫量は、秋蒔きの場合、1 *jirīb* (2,000平方メートル)につき2 *sēr* (1セールは7キログラム)蒔いて、15～20セールの収穫を得る。春蒔きは天候に左右され易く、1970年の春は旱魃のためこの村のものは全滅した。なおその翌年もアフガニスタンは旱魃に見舞われた。

秋の麦蒔きが終ると、先に収穫してあった小麦ととうもろこしを製粉する。村に水車はあったが壊れて今は使っていない。村の西南方遥か遠くに *Tang-i-Wardak* (ワルダク溪谷)という所があり、そこの水車場へろばで運ぶ。片道数時間もかかる道のりである。とくにこの年は水不足のため多くの村で水車が使えなくなったので、この水車場に殺到し、順番待ちにも時間がかかった。朝暗いうちに出かけたり、夜おそく帰ったりで、製粉もきびしい労働である。製粉料は現物払いで、1セール当り、小麦は半 *pāu* (16パウが1セール)、とうもろこしは1パウである。

牧草としてアルファルフア *rishqa*、クローバ *shaftal*、スズメノエンドウ *kalul* の3種を栽培している。いずれも豆科に属する。野菜や果物は少なく、にらと西瓜ぐらいのものである。

家畜は、農耕用に牡牛、搾乳用に牝牛、輸送手段としてろば、食用に山と山羊を飼っている。いずれも最低限の必要を満たすだけである。耕耘は牛2頭だてであるが、自家になければ賃借する。その費用は1日牛1頭につき、耕耘は100アフガニ、脱穀は50である(当時の1アフガニは約4円)。

村民の大部分は自己の農地を所有し、そのあるものは小作をも兼ねる。分益小作制を *dihqānī* といい、その人を *dihqān* という。この小作人は労働力と家畜と農具を、地主が土地と種子を、提供する。水はもちろん土地に権利として附属している。地主对小作人の収穫物の配分比は3対1である。

定額小作制もあり、それを *muzdūrī*、その人を *muzdūr* という。アフガニスタンでは一般に日雇労働がこの語で呼ばれる。この種の小作人は労働力のみを提供する。食事も地主の負担である。アフガン暦1月から9月まで、即ち冬の農閑期を除く期間を労働に従事して、成人なら120~160セール、未成年者なら80セールの小麦を支給される。なお1人1年の小麦消費量は約40セール(280キロ)である。分益小作人には主として世帯主がなるのに対し、定額小作人には独身者がなる。

2 灌漑

この村の灌漑制度はきわめて複雑で、部外者には容易に理解できない。アフガニスタンで農地の広さは、河川灌漑によるものはジリーブという面積の単位で、カーレーズによるものは水量で、それぞれ表される。水量は給水時間で、時間は重量の単位で表される。この国には重量の単位はカーブル、カンダハール、ヘラートの3種あり、ピアル・ヘル村はカーブルの単位を用いている。それは次のようである。

1 kharwār = 80 sēr

1 sēr = 1 man = 4 chārak ÷ 7 kg

1 chārak = 4 pāu

1 pāu = 4 khurd

1 khurd = 24 miṣqāl

とくに水量には次の名称もある。

1 sēr = 1 aud = 1 nōbat (回) = 1 shabāna-rūz (昼夜)

この村で水量単位としての1パウは時間にして90分に相当する。

この村には2本のカーレーズがあり、ともに村の西はずれにある出口から東へ向かって流れる。涸川の北にあるのは Nōzdah-chāh、南のは Ismā'il と呼ばれる。カーレーズはともに公有で、毎年春に泥さらえをする。その職人はガルデーズから来る。費用は村民が共同で負担する。南カーレーズの水量は北のその2倍あり、涸川を横切って北岸にも送られている。南の1パウの水は1ジリーブを灌漑し、北のそれは2パウで1ジリーブに当る。各カーレーズは8日間ですべての地片に水が行きわたるように配水が編成されている。その表は下のとおりである。とくに書か

ない単位はパウで、90分の時間に相当する。人名は頭文字で表す。

北カーレーズ

① M. S.	8	⑥ B. J.	8
M. U.	8	M. S.	8
② M. S.	8	⑦ A. B.	4
M. U.	8	F. D.	4
③ M. S.	8	M. H.	4
M. U.	8	M. S.	4
④ M. S.	8	⑧ G. K.	5 + 32miṣqāl
M. U.	8	N. M.	5 + 32m.
⑤ B. M.	8	S. S.	2.5 + 16m.
A. B.	8	A. B.	2.5 + 16m.

8日で1順し、毎日の合計は16パウ、即ち24時間である。「2.5パウ16ミスカル」とは細かい数字であるが、時間に直すとちょうど4時間となる。

南カーレーズ

① B. Z.	10	M. R.	2.75
S. D.	4	Ma. J.	2.75
M. H.	2	K. M.	0.75
② N. M.	8.5	⑦ K. N.	4
A. H.	7.5	S. M.	4
③ Ma. S.	16	A. R.	3
④ F. M.	8	A. L.	3
S. Kar.	6	N. M.	2
S. M.	2	⑧ K. M.	3
⑤ S. Kam.	5.5	M. S.	2.75
A. S.	4.625	B. J.	2.25
M. S.	3.5	S. D.	2.25
A. G.	1.75	B. M.	2
K. M.	0.625	H. K.	1.5
⑥ N. G.	4.25	A. B.	1.5
A. A.	2.75	S. S.	0.75
M. J.	2.75		

ここでも1日の合計は16ハツ、24時間である。

上の表は数人の農民から聞きとったものである。別に個々の農民から所有農地のパウ数も聞い

ておいた。本人の申し立てとこの表と合うのもあり合わないものもある。例えば南の⑤ A. S. は表では4.625であり、本人の言では yak nīm khurd kam panj pāu (5パウに1フルド半たらず)で、まさしく4.625パウとなる。しかし南の④ F. M. の土地は、本人の言によれば nīm pāu kam nīm nōbat (2 ノーバトに半パウたらず)=7 パウ 2 フルド=30フルドを彼ら 4 人兄弟で均分し、1人当たり nīm khurd kam nīm chāarak (半チャーラクに半フルドたらず)=7.5フルドずつになったという。この厳密な計算は信用できるので、F. M. が代表する 4 人兄弟のパウ数は表にある 8 でなく、7.5 でなければならぬ。

以上の計算上の用水配分規則は理解できる。わからないのはこれと実際との関係である。北カーレーズの分け前を時間に直すとすべて整数になるが、南はそうではない。例えば 2.25 パウは 3 時間 22 分 30 秒となる。この時間をどうして区切るのか。彼らは現在でもほとんど時計をもっていない。この方式は古くからの慣行であるから、時計をあてにして作られたものではない。またたとえ細かい時間を区切れたとしても、スコップで土を掘っただけのジュイー(水路)の水量を分や秒単位で計ることは無意味である。

農民たちのやり方は、ある 1 片の畑の畦を切って水を導入する。その畑におよそ水が一杯になると口をせきとめて他の畑へ水をまわす。それだけである。時計はなし、配水表もなし、mīrāb と呼ばれる水の管理人もいない。誰かが指示するのでもない。農民たちがあの柄の長いスコップ bēl をかついで歩きまわるだけで、複雑な配水が整然と行われていくのは一つの奇蹟である。

理論と実際の間をつきとめるためには、300 片以上あるこの村の農地の地図を作り、その所有者を知り、時々刻々の水の行方を記入して 8 日間かその倍ぐらいの日数を経れば、法則が帰納できるかもしれない。それを実行するためには灌漑が行われている時期に約 2 か月という時日を必要とするであろう。我々にそれだけの時間がなかった。

なおこの村での有力地主として Ma. S. 即ち村長マリク・サルダールと、M. S. ムンマド・サルワル、M. U. ムハンマド・ウマル兄弟の 3 人が挙げられることが上の表からわかる。

3 商業

現在、村には商店はない。以前 1 軒あったが営業不振で閉店した。買物は、2～3 日ごとに誰か所用でカーブルへ行く人があり、その人に依頼する。またときおり外部から馬やろばに商品を積んだ物売りが来る。調査期間 1 か月中に来村した商人は下のようである。

月 日	商 品	出発地	人数
9 26	ぶどう	クルンガール	1
〃 29	(綿打ち直し)	〃	2
〃 30	トマト、なす	デヒ・ナウ	1
10 2	ぶどう	プリ・アラム	1
〃 5	洋服	マイダーン	2

村民は現金でなく小麦で買う。例えばぶどうとの交換価値は、とうもろこしは3分の1、小麦は半分、小麦粉は等価である(ぶどうと小麦・小麦粉との交換比率は1972年に調査したイラン国ファールス州ボレノウ村でも同様である)。現金ならぶどう1パウにつき3アフガニである。

また遊牧民との売買もあり、穀物を売るのに、1セール当り小麦は55アフガニ、とうもろこしは40アフガニである。羊を買うこともあり、これは1年ほどたって代金を払うようである。また革製品としてサンダル tsaplay を120アフガニで買った者もいる。

そのほか羊やさらには土地の売買も行われていることが村民の会話から察せられるが、その実態はつかみにくい。この村の農地の価格は1パウ、即ち1ジリーブ当り4万アフガニといわれる。我々のもうひとつの調査地ヘラート近郊のカバビアン村では8万アフガニである。

4 農業以外の職業

村長マリク・サルダールは本村のほかシュルク、カライ・サフエード、ミールワール、ハル・カーレーズの4村をも管轄する。村民から何の給与も受けない。彼はカーブルにも家を持ち、自分や兄弟の子をそこに住まわせて学校へ通わせている。自分もそこに住むことがあり、我々の調査期間の後半しか村にいなかった。彼の留守中はその弟が代行しているようであるが、村長の職務として著しいものはない。

村に村会はなく、「白鬚」と称される長老もいない。

この村に mulla の肩書をもつものが4人いるが、そのうち1人が実際にその職務を行っており、他は資格をもつだけである。現職ムッラーに対して村民は老幼男女をとわず1人当り1年に半セールの小麦を収穫時に与える。

talib はムッラーになるために勉強中の者である。何年かムッラーについて勉強し、試験に通ればムッラーに昇格する。ターリブになるのは兄弟の多いうちの学問の好きな者で、ターリブになればお布施で自活できるから口減らしにもなる。葬式の謝礼は、ムッラーが100、ターリブが20アフガニといわれる。

床屋 dalak はこの村に1戸あり、本村のほかシュルク、ムッラー・インアーム、カライ・サフエード、ミールワールも営業範囲に入っている。理髪には鞆に道具を入れて持ち歩き、随時随処で行う。そのほか割礼、結婚式の音楽演奏、死体洗いも床屋の仕事に属する。さらには農具や馬具の修繕も引き受けている。理髪の報酬は1人1年に半セールの小麦である。これも収穫時に与える。その住居は村の西南の丘の中腹にあり、村全体を見下ろすことができる。戸主は老齢のため隠退し、2人の子が働いている。土地はもたない。その庭先は村の情報の中心であり、社交や取引の場となっている。

日干煉瓦製造には村で1人が兼業として従事している。煉瓦1,000箇が50アフガニである。

大工兼左官が村に1人いるが、調査中はムグル・ヘル村へ仕事に行っており不在だった。労賃は小

麦で取る。

牧夫として1家族が3年前に遊牧から定着し、村民の家畜を預って放牧している。父はろば、子は羊と山羊を受けもつ。これも1種のムズドゥーリーである。

警察官。カーブルの下級警察官、とくに turāfīk (< traffic) と呼ばれる交通巡査は、ローガル州やその西方のワルダク州の出身のパシュトゥン人が多い。この村出身の警察官は7人(うち1人は警察学校生徒)で、いずれも家族は村に住み、週末に帰省し、農繁期には休暇をとって畑で働く。月給は約900アフガニである。

III 村の文化

1 パシュトゥ語

1964年10月1日に発布されたアフガニスタン国憲法の第1章「国家」の第3条には「アフガニスタンの諸言語の中でパシュトゥ語とダリー語が公用語である」とある。ダリー語とはアフガニスタンのペルシア語のことである。また第3章「国民の権利および義務」の第35条には「国語たるパシュトゥ語の発展と強化のために有効な計画を準備し実施することは国家の義務である」という。この憲法は1973年のクーデターにより停止されたけれども、パシュトゥ語尊重の傾向に変更はない。その一例として、ムハンマド・ダーウド大統領(王族の出で元首相)がふだんはペルシア語しか使わないにもかかわらず、ある演説のときにパシュトゥ語を用いたことが伝えられている。しかし政府の熱意にもかかわらず、この国で圧倒的に重要な言語はペルシア語である。公文書はほとんどペルシア語で綴られ、人々の会話も、とくに都市においてはカンダハールを例外として、ペルシア語で行われている。アフガニスタンの人口は1970年版 *The Kabul Times Annual* 所載の Ghulam Jailani Arez (カーブル大学教授)、*Geography of Afghanistan* によれば、16,113,00である。そのうちの5～6割がパシュトゥン人である(それとほぼ同数がパキスタン領に居住する)。それにふたつの系統があり、その1はDurrānī系で、18世紀半ばの Aḥmad Shāh Bābā 以来、アフガニスタンの支配権を握っている。他は Ghilzai 系で、トルコ族の一部 Khalaj / Khilij がインドに入って建てた Khiljī 朝の後裔であるといわれる。イランに入ってからサファヴィー朝を倒したのがこのギルザイである。ピアル・ヘル村などのパシュトゥンはこの系統に属する。

なおパシュトゥン族の部族名に接尾語 -zai (<ペルシア語 zāidan 生まれる)、-khel がつくものが多く、いずれも「・・・の子孫」の意味をもつ。

パシュトゥン族の住地はアフガニスタンの東部と南部、それにパキスタン西北部であるが、今世紀に入ってヒンズークシ山脈の北側いわゆるトルキスタンへの移住も見られる。ピアル・ヘル村でもそうである。彼ら固有の言語はパシュトゥ語で、またペルシア語をも併用する。彼らが都市に住みついて世代を経ればパシュトゥ語を失ってペルシア語だけを使うようになる。したがってパシュトゥン人のすべてがパシュトゥ語を使用しているわけではない。

アフガニスタン人の書くものについて注意しなければならないのは、国民的統一を強調するあまり民族間の人種的文化的相違に言及しないことである。彼らによればすべてのアフガニスタン国民はアーリア系であり、buz-kashī (トルコ族の騎馬競技)も、atan (パシュトゥンの踊り)も、同じくアフガニスタンのスポーツとなってしまう。

この村の村民の母語はパシュトゥ語である。彼ら相互の会話の用語はパシュトゥ語である。また彼らの多くはペルシア語(カーブル方言)をも使う。

この村のパシュトゥ語はその北部方言に属する。アフガニスタン内外の学者は一致してパシュトゥ語を2方言に大別する。即ちジャララバードやベシャワールを中心とする北部方言と、カンダハールを中心とする南部方言である。両方言の著しい相違点は次のようである。

アラビア文字 re の上下に点を1つずつつけたもの：

北 gāf と同じく g の音・

南 有声，硬口蓋，捲舌，摩擦音， zz 中国語の chih に同じ

アラビア文字 sīn の上下に点を1つずつつけたもの：

北 高口蓋，摩擦音 kh'

南 無声，硬口蓋，捲舌，摩擦音 ss 中国語の shih に同じ。

「パシュトゥン」族，「パシュトゥ」語の「シュ」が後者で，北部では Pakh'tū パフトゥ，南部では Passtū パシュトゥである。また「ベシャワール」と書かれる地名は，現地音では Pikh'āwar ピハーワールとなる。

この村のパシュトゥ語が北部方言に属するということは，外界との関係が，ジャララバードやベシャワールとあるが，カンダハールとはないということである。例を挙げれば，この村を通る遊牧民は西のハザーラジャート高地と東のニングラハール州・パクティアー州という東西の移動をする。また村民の移動の方向も東または北であり，東方のパクティアー，さらにはパキスタンとの商業関係をもっていたり，移住先がカーブルまたはトルキスタンである。その他の移住先としてカンダハールには1人もなく，ヘラートへ1家族があるだけである。Ⅱの2の灌漑表のうち，北の⑧のG.K.と南の⑧のH.K.はトルキスタンに移住し，土地を分益小作に出している。

2 ペルシア語

このパシュトゥ語使用農村におけるペルシア語の位置を示す事例を挙げる。床屋の庭は上述のとおり社交の場である。1人の客人が数人の村民と会話している。客はミールワール村の出身で，カーブルで自動車の整備工をしており，読み書きができる。会話の用語はもちろんパシュトゥ語である。村民たちは文盲である。その1人が手紙を客人に托すことになり，口述して筆記させた。口述はパシュトゥ語であったが，筆記されたものはペルシア語であった。パシュトゥ語でも書けるはずである。しかし書くときにはペルシア語を用いた。ペルシア語はこのように書写用語としての役割を果たしている。

ペルシア語はさらにまた共通語として重要である。この国で見知らぬ同士はかならずペルシア語で会話する。そのペルシア語の発音によって互いにパシュトゥ語使用者とわかれば、パシュトゥ語にきりかえる。パシュトゥ語使用者の発音するペルシア語にはペルシア語特有のなめらかさがなく、ぎすぎすしている、外国人にもある程度は見分けられる。この村の人は外界との接触によってペルシア語を習得する。したがってこの村のペルシア語の問題は社会や経済と深く関わっている。

村民が外へ出る場合の1つに「サウダーギリ－」というのがある。saudā はペルシア語・パシュトゥ語で「取引・売買」の意。-girī は行為者を表す接尾語 -gar に抽象名詞化の接尾語 ī がついたものか、もしくはペルシア語動詞「取る」の現在語根 gīr に抽象名詞化の ī がついたものである。

このサウダーギリ－とは遠距離商業のことで、この村の経験者の1人の説明によると、例えば次のようなものである。夏の初めに2万～3万アフガニの資金をもって村を出発する。仲間7～8人と一緒である。道中に家のないところでは野宿し、パンも自分で焼く。行先はハザーラジャートで、遊牧民が家畜を連れて来ており、彼らから子羊を買う。Ghōr 州の中心 Chaghcharān に近い Kāsī, Ābul などまで行く。買った羊を追って草を食わせながら歩き、トルキスタンまたはカーブルで羊を売り払う。トルキスタンの町としてマザーリ・シャリーフ、アクチャ、マイマナ、カライ・ナウが挙げられた。ヘラートまでは行かない。東はジャララバード、南はガズニーまでが行動範囲である。1970年は旱魃による麦蒔き小麦全滅のため資金不足で、村からは誰も出なかった。サウダーギリ－とは農民が兼業として営む商業または遊牧のことである。なおこれに相当するものは、カバビアン村では chūb-dārī といい、羊のほか棉やピスタチオも扱う。サウダーギリ－のほか、らくだの群を雇用して運送業を営んだ村民もある。これも遊牧民の副業であったが、最近は自動車の発達により衰えた。農民がこうした兼業を営む条件としては、まず資金があることと、次には男1人がいなくても労働力が不足しない、即ち働き手が2人以上いることがある。この兼業は農民の経済力を向上させる有力な手段で、村長の家はその父の代にこのサウダーギリ－によって経済成長を遂げたのである。

このサウダーギリ－は、上述の経済的意義のほかに、男性が苦難に耐えて長旅をし取引をすることによって1人前の人間としての能力を磨くという社会的意義と、よその土地でよその人に接し、共通語たるペルシア語を習得するという文化的意義をも持つものである。

ペルシア語習得の機会として兵役がある。アフガニスタンでは22歳の男子を徴発して2年間の軍務に服せしめる。これは経済的に見れば、労働力欠乏の害、または多人数家族の口減らしの益をもたらす。また社会的文化的には僻地の青年にも他地域とくに都市の生活を知らしめるという教育的効果が大きい。

見習僧であるターリブはかならず他郷で修業する。この村出身のターリブは4人で、ムグル・ヘル、デヒ・ナウその他の地へ赴いており、また他村から1～2人のターリブがこの村へ来て、

この村のムッラーから1対1で教育を受けている。

1例だけであるがタージク族の妻をめぐって、その家族がタージクからペルシア語を習った。なおパシュトゥンはタージクのほか、サイイドやハージャとも妻をやりとりする。しかしハザーラとは妻を取るが与えないといわれる。これはパシュトゥンがハザーラより社会的地位が高いからである。

以上はすべて村の男性の言語生活であるが、女性についていえば、カーブルやトルキスタンの生活経験のあるものはペルシア語を解するが、多くの女性は外界との接触をもたないため、パシュトゥ語しか知らない。

以上、村民が村外へ出て行ってペルシア語を習得する場合を挙げたが、村内にいても覚えることができる。もちろんこの場合、そのペルシア語は幼稚であやふやであるが一応の意思の疏通はできる。その年齢は10～20歳で社会的活動を始める時期である。

3 教育

村には小学校があり、3年級までで、モスクを教場としている。先生は1人で男性、洋服を着て、カラクル帽をかぶっている。いくつもの小学校をかけもちで、この村に滞在中は民家に下宿し、村民から食事を提供される。給料は政府より受ける。授業は午前中だけ、生徒は男ばかり10人余、学年の別なく1クラスだけで、科目はパシュトゥ語と算数が主である。

この小学校を卒業して他地へ行ってさらに就学するものもある。例えば青年 N. M. はカーブへ行って6年級まで終えた。彼はカーブルの警官を志望している。また青年 A. A. はクルンガールで6年級まで、マイダーン(カーブル州の西隣ワルダク州の中心)で12年級まで学び、この村でもっとも学歴が高い。彼はのちに念願がかないカーブルの銀行に就職した。なお前述のとおり村長一家はカーブルに家を持ち子弟をそこから学校へ通わせている。

4、宗教

アフガニスタン国憲法はその第1章第2条において「アフガニスタンの宗教はイスラム教である。国家の行う宗教儀礼はハナフィー学派の規定に従う。非イスラム教徒は公共の体面と安寧のために法の定める範囲内においてみずからの宗教儀礼を遂行する自由を有する」と述べている。パシュトゥン族は Tūrī という部族がシーアであることを例外としてすべてスンニー派のハナフィー学派に属する。この村も同様である。ムッラーが毎日毎度アザーン(礼拝への招集)を唱え、礼拝を指導する。誕生・結婚・葬式の儀礼をつかさどるのもムッラーの職務である。

聖者の墓 ziyārat (イランの emāmzāde に当る)が丘の上にさらに土盛りして高くした上に建てられ、そこからは眺望よく、また遠方からはよい目標となる。調査中にそこへの参詣は見られなかった。アフガニスタンのどの村にも、モスクと、聖者の墓がある。前者は神を礼拝するための場所であり、後者は妊娠・安産・病氣治癒などの祈祷の対象である。前者はイスラム教の表向

きの高次元の宗教行為であり、後者はその蔭の一面たるアニミズム的信仰である。また前者は男性、後者は女性により行われる。

ラマザン月の断食はきびしく守られているようである。飲酒はまったく見られない。

〔後記〕

これは昭和45年度文部省科学研究費を受けて実施された「西アジア農村の人文地理学的調査」(担当者＝東大教授大野盛雄)の報告の一部である。調査の対象となったのは、アフガニスタン国ヘラート州のカバビアン村(調査期間7月26日～8月27日)とローガル州のピアル・ヘル村(9月22日～10月22日)である。前者については「カバビアン村の文化と言語」として「オリエント」17の1(49年9月)に発表した。本稿は後者についてである。なおこの年の調査の報告として大野盛雄『アフガニスタンの農村から』(岩波新書、昭46)がある。。